

部 長 森 川 智 之
石 川 学
研究主任 加 藤 俊 輔
部 員 数 27名

1 研究主題

豊かな人間性を育む特別活動の創意工夫

2 はじめに

研究主題である豊かな人間性を育むために、各校の現状を踏まえて、ねらいに沿う具体的な取り組みや、教育現場ニーズの多様化に伴う時間短縮、新型コロナウイルス感染防止対策を講じる中で、最大限の効果を発揮する取り組みについて、協議をもとに追求している。

3 研究経過

- (1) 各校の特別活動の取り組みについて、毎月の研究会でディスカッションテーマを設け、小グループで情報交換し、全体で内容を共有し、協議した。
- (2) ディスカッションテーマについては、実施計画立案前に設定し、今年度の各校の実践に活かせるような計画で活動を進めた。
- (3) 来年度以降を見据え、コロナ禍でも行える体制、各校の実践の工夫を共有した。

4 研究の概要

月ごとの取り組み

- (1) 5月 <テーマ>運動会と体育大会、文化祭について

コロナ禍における運動会、文化祭のあり方について検討した。今まで当たり前のように行ってきた応援合戦や合唱のかわりに、どのように集団としての高まりを育てるかを話し合った。小学校では、児童および観覧する保護者の密を避けるため、学年を分けて実施していることが分かった。また、熱中症予防の観点から、開催時期を10月以降にずらすなどの工夫もされていた。中学校では、本番だけでなく、練習から密を避けることや練習場所の確保、他学年の活動をどう見せるかなどが課題となっていることが分かった。

- (2) 10月 <テーマ>送る会、感謝の会について

各学年の出し物をビデオ撮影し、それを視聴するという形をとっている学校が多かった。小学校では、1～5年生が6年生といっしょに遊ぶという「思い出をつくる会」というものを実施したところもあった。中学校では、動画と現実をリンクさせた取り組みを行うなど、工夫のこら

された実践もあった。いずれにしても、送られる側、送る側の気持ちを見定めることが重要であることが分かった。また、中学3年生は、何を残して去っていくのか、こういったものを学校の伝統として引き継いでいってほしいのかを明確にすること、それをどうやって1，2年生に伝えるのかというのが課題であると感じた。

5 今後の課題

2020年には小学校、2021年には中学校の学習指導要領が改訂され、全面実施となった。特別活動は、他教科を支える基盤であり、よりよい人間関係を形成し、自己実現や社会参画につながる大切な活動である。だからこそ、限られた時間の中で、我々教員が、目指すべき児童・生徒像を明確に持ち、それぞれの活動の目的をはっきりさせ、これからも特別活動を研究・実践していくことが大切であると感じている。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、今まで当たり前のように行われてきた特別活動にも変化が生じている。特に、生徒会活動、学校行事をどのように企画、実行していくかが、今後の課題といえる。生徒会活動の目標は、「異年齢の生徒同士で協力し、学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計画を立て役割を分担し、協力して運営することに自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。」である。学校規模によっては、全校児童・生徒で集まることが困難な学校もある。そういった中でも、他学年との関わりを感じさせる活動を実践していかなければならない。中学校では、全校で集まらない代わりに、スタッフ制を導入して生徒一人一人に役割を与えたり、動画を用いて他学年とのつながりを意識させたりすることを行っている学校もあった。限られた条件の中で、いかに他学年とのつながりを意識させるかが重要である。学校行事も同様である。運動会・体育大会、文化祭など、全校児童・生徒が集まって行われる行事は、軒並み変更を余儀なくされている。中学校では、体育大会での応援合戦、文化祭での合唱コンクールなど、生徒の心を育てる行事のあり方が大きく問われている。

感染症対策、行事の精選と、特別活動には未だかつてないほどの逆風が吹いている。そういった中でも、集団活動の意義や人間関係をよりよく形成する力を養っていかなければならない。しかし、裏を返せば、特別活動の意義や行事の目的を一つ一つ考えるチャンスでもある。本当に子どもたちに必要なものを見極め実践していくことが大切である。また、今までのような行事が行えないのであれば、日頃の学級活動や学級経営に力を注ぐことがより重要となってくる。今だからこそ、「行事に頼らない学級経営」が必要なのではないだろうか。今後は、そういった視点を持って、特別活動を研究・実践していくことが大切であると感じている。